

遊美

- 1 小原 えり子さんの作品と作品についての言葉
- 2 作家探訪 宮本 覚次郎先生
- 3 美術鑑賞旅行
- 4 美に遊ぶ
- 5 学芸員による鑑賞講座
令和5年度 美術館アカデミー
- 6 心に残る私の一点
あとがき



小原 えり子
「鉄絵丸文花器」
2023年
21×21×39cm

黒い地に丸いものが浮かんでいる模様をデザインする時は、どうしたら「ゆらり、ゆらゆら」「ふわふわ」しているように見えるか、どんな配置にしたらよいのか毎回悩みます。

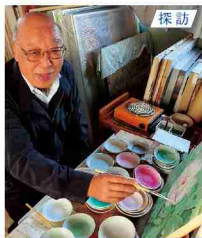
重い陶器ですが、軽やかさを感じられるデザインを考えます。風船、シャボン玉や数年前県立歴史館のいちよう祭りで見たスカイランタンもヒントになります。笠間陶芸美術館の陶芸展はもちろん、近代美術館の絵画展からも刺激を受けています。

陶芸に出会ったのは30年以上も前のことです。友人に誘われて参加した講習会で、自分の手が形あ

る物を作りだすことが出来る事に感動し、すぐ入会しました。千葉に住んでいる時、工芸会で活躍されている神谷紀雄先生のご指導を受ける縁に恵まれ今に至っています。先生は「自分らしい作品を作りなさい。良いものを沢山見てまず自分が感動することが大切です」とおっしゃいます。

昨年秋の茨城県展で思いがけず会友賞を頂くことが出来ました。作品を作る時はいつも果たしてこれで良いのか迷いますが、その迷う時間も楽しみながら続けていきたいと思っています。

(水戸市在住)



探訪

日本画家
宮本 覚次郎 先生を訪ねて

風景に心惹かれて描く

先生の「覚次郎」という名前には印象的である。由来を聞けば、自覚大悟（自らを悟りたつきり理解すること）という言葉が源になっているとのこと。お父様がこの言葉を分けて兄には「悟」、弟は「覚」と授けたそうである。

先生のアトリエはR赤塚駅から徒歩15分の住宅地にある。ここやかに私たちをお迎え下さった玄関には掛け軸があり、『おかげさま』と書かれてあった。柔らかいなかにも絶妙な緩急のある文字である。書家であるお兄様の揮毫とのことで、「私はこの言葉が好きなのです」と兄弟愛が覗く。

壁一面が本棚になっている居間で話を伺った。少年の頃は、教師から、「お前は何でもやれるが大成しないだろう、器用貧乏だ」と面と向かって言われたと苦笑する。将来は書家になりたかったが、4歳上の兄が先に書家を生業としたため、別の道を模索することになった。縁あって、海老沢東丘先生（木村武山最後の弟子）より彩色画を勧められ、日本画に進むことに決めた。24歳の頃である。とはいえ、先生は日本画一筋だったわけではない。印刷会社の社員として定年まで勤めながら、日画会に籍を置き、写生会や研究会にて研鑽していたそうである。印刷

みやもと かくじろう
宮本 覚次郎

覚次郎

会社は繁忙期には仕事が深夜にも及びぶ。そのような中でも作品を仕上げては展覧会に出すという日々を重ねた。「仕事との両立は、忙しいほど捗る気がした」というから驚きだ。また、書も継続され、定年後は筆耕を頼まれ20年も続けられたと聞けば、「器用貧乏」などではなく「多才な人」と言わざるをえない。

制作する部屋も拝見した。書道部屋では座して、絵画部屋では椅子に座って制作。先生は画板をテーブル上のイーゼルに立て掛けて描く。高名な先生がこうにされてきたことからヒントを得たという。傍らには沢山の作品が置いてあり、それらに囲まれる中の制作である。「出すのが大変だね、だから大きさは40号か50号までかなあ」と笑っておられた。

先生の作品は風景画が多い。笠間という自然豊かな地で育ったこともあるだろう。山が好きなのは様々な木があるからだそう。日光、那須などもよく行ったそうである。三方が山に囲まれた岩間の愛宕山付近は特に好きな風景。雨上がりの霧を「おこわを蒸かす」と、のどかな言葉で表現されている。「良い風景に出会えた時は、無常観でもいのでしょうか、じっと見ているのが好きです。体に何かが入ってくるのです。見るということとはよく見てないと



「白薔」
2008年／麻紙・岩絵具／53.0×45.5cm



「霧れゆく」
2014年／麻紙・岩絵具／100×80.3cm

見えないうことなのですよ」「心に合った風景を描ける、有り難いことだなと思っています」先生のこの言葉が心に残る。

物静かな先生に「光栄でした」「やり切った感のある作品でした」と力強く言われたのは、1992年日春展（日展日本画部春季展）に出品した『萌春（ほうしゅん）』が外務省買上げとなったことである。他にも永田基金買上げ、大観賞受賞、小林果居人賞受賞など内外に認められる功績を残していらっしゃる。

器用貧乏と言われた少年は今や育んだ才能を開花させて人生を楽しむ芸術家である。



「萌春」
1992年／麻紙・岩絵具／116.7×90.9cm
外務省買上げ作品

1942年 笠間市に生まれる
1966年 日本画家 海老沢東丘先生に師事
1967年 茨城県画会に加入
1967年 茨城県芸術祭美術展覧会出品 初入選
1968年 茨城県芸術祭美術展覧会出品 受賞
以後毎年出品、会費賞状受賞
1981年 茨城県美術展覧会 会員
1990年 茨城県芸術祭美術展覧会 小林果居人賞受賞

1991年 茨城県芸術祭美術展覧会 審査員
1992年 日春展入選作 外務省買上げ
1994年 茨城県芸術祭美術展覧会 永田基金買上げ
2004年 ギャラリー手塚にて初個展
以後2006年、2008年、2011年、2018年
同ギャラリーにて個展
2014年 茨城県芸術祭美術展覧会 大観賞受賞
2018年 ギャラリー一古にて個展

現 在／茨城県美術展覧会委員
水戸市芸術祭美術展覧会運営委員
水戸美術家連盟常任理事
日画会会員事務局長
笠間市文化連盟理事
常士社会員
アトリエ／水戸市見沼3-1421-7

2023年11月1日、会員42名が川村記念美術館で「ジョセフ・アルバース展」及びホキ美術館で、「瞳の奥にあるもの—表情でみる人物画展—」を鑑賞しました。

造形・写実画巡りの旅へ

吉川 菊枝



曇ひとつない青空の天気恵まれ、心躍るまさに美術館の旅にぴったりなお出かけ日和。

最初に向かった川村美術館は、里山の地形を生かした緑豊かな庭園内に、森の中のシャトーを思わせる佇まいが感じられました。館内では、ジョセフ・アルバース展が催されていました。彼は、画家、デザイナー、教師として、思考、探求し続け、生み出された家具、造形、デザイン等の作品は、私の想像を超えるものであり、目をみはるものでした。若い人達の熱心に見入る姿も印象的でした。

お楽しみの昼食では、三井ガーデンホテルでの和食を堪能しました。

午後は、写実画専門のホキ美術館を訪問し、「瞳の奥にあるもの—表情でみる人物画展—」を観ました。塩谷亮さんの「想い」が、私の心を捉えました。瞳の間からのうつろな瞳は何を想うのか、少しあいた口元が、私に何かを語りかけてくる感覚におちりました。

原雅幸さんの「ドイル家のメールボックス」は、自然の太木にメールボックスがおかれ、奥にひつじ達がゆっくりと餌を食べる、のどかな風景、見ていて自分が無になれる心境。どの作品を見ても、さまざまな質感など、本当にリアルに描き分けられ、見応えがあるものばかりでした。

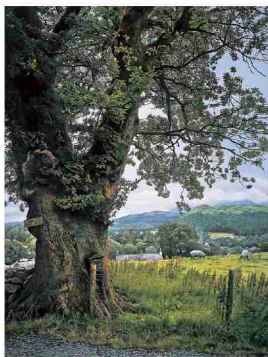
日頃の心の洗濯をした一日でした。友の会委員・事務局の皆様には、大変お世話になりありがとうございました。今後ともよろしくお願ひ致します。(銚田市在住)



塩谷 亮「想い」/2021年
油彩・白亜地・カンヴァス、60.6×45.5cm / ホキ美術館蔵



ホキ美術館「瞳の奥にあるもの—表情でみる人物画展—」鑑賞(2023年11月1日)



原 雅幸「ドイル家のメールボックス」/2012年
油彩・カンヴァス・パネル、80.4×60.7cm / ホキ美術館蔵



中川 喜久治

令和6年も早、弥生三月、1年の4分の1が過ぎようとしています。

梅、桃、桜と茨城県は百花繚乱、東西南北、どちらに行っても素晴らしい自然の美しさを楽しませてくれています。3月は我々にもう一つ、けじめ、区切りの機微として別れと出会いの有り難さを教えてくれる季節でもあります。多くの法人、企業にとっても、国の会計年度、教育機関の入学と卒業の期間が4月から3月である事の影響が強いからかと思いますが、この時節は、本格的な年の移り変わり、即ち、令和5年度から6年度、卯年

から龍年に移り変わる季節でもあります。新暦、旧暦、年と年度、我が国は複層的な楽しみを創り出してきました。

先日ある式典に参列した時、(ここ数年、コロナ禍で録音テープを流すだけの事が多かったのですが)久しぶりに国歌斉唱があり、プロフェッショナルの声楽家がソングリーダーとして前に出て歌われた素晴らしい歌唱力の「君が代」に感動いたしました。国家「君が代」は、王朝、民族、国民、国家の繁栄を願う祈りの歌であると認識していますが、歌詞を正確に理解し自分の中で昇華できてないとそこまで歌えないであろうと思われるほど、美しい歌声に接し、とても良い機会を頂きました。

長いコロナ禍は色々な物、特に芸術芸能関係が「不要不急」の観点から制約を受けました。仕方が無い事でしたが、いささか過ぎた点もあった気が致します。荘子に「無用の用」の教えがあります。私は「無用の用」の話になると「楽は虚に不出」が思い浮かびます。「音楽の豊かな響きは空っぽの穴から生まれる」の意味のようです。管楽器、弦楽器、打楽器

などの穴、空洞の重要性になぞらえた教えなのでしょう。「無、ゼロ、虚」による美の楽しみですね。

今年は「龍年」です。龍は「マイナス1」、「99.9」の重要性を教えてください。それは「画竜点睛を欠く」です。特に「点睛」の「せい」に注目です。(日と目の違い)最後の仕上げに対する感性に驚愕します。「満つれば欠ける」の例えもあります。日光東照宮陽明門の「逆さ柱」にも通じる「言霊」を大切にしてきた文化でもあり、中部伝来ですが、日本特有の遊び心、いわゆる一つの「美」意識、感性の豊かさとも思えます。あえて満点を取らない事も「美」、「智」の楽しみ、遊びであるのかも知れません。

人によっては天文学、数式、料理、お酒の味に「遊び心」を感じるのでしょうか、大谷選手ホームランやスライダーに、又、競走馬イクイノックスの走りに「美しさ」を見いだされる方も多いでしょう。今年も遊び心を忘れずに色々な活動を通して「美」を楽しみ、種々の「感動」に出会いたいと願っています。

(土浦市在住)



新内 佐斗司「卵竜童子」2012年
ブロンズ、15×15cm/筆名所有



中川氏が会長を務める「茨城県民オペラ協会」ニューイヤーコンサート2024の舞台風景 左：第1部「新春を奏く」、右：第2部「魔笛」
令和5年度茨城県芸術祭の最後を飾った、2024年1月7日 ヒロサワシティ会館大ホールでの公演



学芸員による鑑賞講座

2023年11月10日

講演題目 間島秀徳の芸術について
講師 学芸員 塩田 毅雄氏
場所 茨城県近代美術館 地階会議室

安 友子

前回の木澤沙羅学芸員の鑑賞講座を受け、本物と対面した時の深い感動が忘れられずに、鑑賞講座2回目の参加となった。本講座で、墨や絵の具を、水の動きによって画面に定着させながら作品制作を行う間島秀徳氏の動画が紹介された。その日本画とは思えない壮大な作品の紹介を、年代を追いつつ、展示の工夫も含めてリアルな説明を聞くことができた。今回の企画展において、間島氏の壮大な作品群を美術館の中いかに魅力的に展示するか、苦心された話はとても興味深かった。



講座風景

そして、本物との出会いは、想像以上であった。天井から流れ落ちる滝や川、大海原を想わせる青と白と黒の巨大作品群が、時には円柱や六角柱となって現れる。アバターとなって作品の中に入り込んだような錯覚さえ覚えた。また、岡倉天心とのコラボで、茶室の床の間に飾られた間島氏の軸や風炉先は、日常の美を感じる素晴らしい展示であった。次回も、会員の皆さんと共に美術館を楽しみたいと思う。

(ひたちなか市在住)



茨城県天心記念五浦美術館「間島秀徳展」会場

どなたでも参加できる茨城大学の学外授業 令和5年度 美術館アカデミー

2023年12月16日

講演題目 16世紀後半のイタリア画家
フェデリコ・パロッチの作品解釈
カプチーノ修道会の精神性に基づいて
講師 甲斐教行氏(茨城大学教育学部 教授)
場所 茨城県近代美術館 地階講堂

ルネサンス都市ウルビーノ出身の画家パロッチ(1535-1612年)は、情感のこもった緻密で完成度の高い作風により、イタリア各地やヨーロッパの主要宮廷からの制作依頼が絶えませんでした。しかし、その芸術性の高さにもかかわらず、現存作品30数点と少ないこともあり、わが国ではほとんど知られていません。

本アカデミーではパロッチの各時期の代表作を紹介し、さらに画家が生涯密接な関係を保ったカプチーノ修道会とのかかわりを視野に入れつつ、作品についての解釈を行います。《講演会チラシより》

パロッチは甲斐先生のフィレンツェ大学留学中の研究テーマであった。ティントレットやエル・グレコとほぼ同時代の画家である。後期ルネサンスから

マニエリズムさらにバロック的表現までパロッチの芸術表現様式は変遷していった。その作品の系列と魅力、パロッチの波乱に満ちた生涯についても、画像や資料を用い講義された。興味深い内容がもり沢山の先生の講義に、学生と一般聴講生はノートを取



フェデリコ・パロッチ「マドンナ・デル・ポポロ」
1575-1579年、板上に油彩/395×252cm
フィレンツェ、ウフィツィ美術館蔵

りながら熱心に聞き入っていた。美術館アカデミーは大学の講義を受けられるチャンスです。是非参加してはいかがでしょうか。



講師 甲斐 教行氏

心に残る私の一点

「青海波模様カクテル・ドレス」 山口陽子制作(鉤針編み)

山本 こうこ
浩子

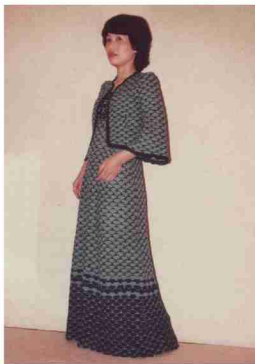
今から40数年前のことです。一本の糸から一つの形にしていく編み物の面白さを知った私は、技術を身につけたいと資格を取り、編むことに熱中していました。ところが段々、出来上がった作品に物足りなさを感じるようになってきていました。

そんな時、私の目の前に現れた作品が、真っ赤な細いモヘア糸で編まれたお色直し用の“イブニング・ドレス”です。それは、制作者の想いの深さ・創造性の豊かさが洗練され、格调高い輝きとなって私の心を釘付けにしました。手編み作品を見て感動したのは、この時が初めてです。編み物の素晴らしい世界を知った私は迷わず、ドレスの制作者山口陽子先生に弟子入りしました。

暫くして、山口先生を中心に女性3人で『立体手編み工房サン・ニット』を立ち上げ、オーダーを中心にアトリエ活動に励みました。編む技術だけでなく、人の心や生き方などを学ぶまで修行道場のようなもので、苦勞もありましたが、充実感・達成感を多く味わうことが出来ました。

編み物は、今でも私の心の支えであり、生き方に繋がっています。因みに、「立体手編み工房」とは、今は亡き師匠山口陽子の想い「人間の身体が立体であるように、生き方も立体であれ」からです。その

理念の下に作られた師匠の作品(特にドレス類)は、お客様お買い上げで手元にはありません。今となつてはたった一枚の写真に残された貴重な一点、「青海波模様カクテル・ドレス」それがもう一つの「心に残る私の一点」です。(ひたちなか市在住)



筆者試着の「青海波模様カクテル・ドレス」1980年代

あとがき

2024年は年明け早々、能登半島地震という大変な災害での幕開けとなつてしまいました。厳しい寒さの中、見通しの立たない難題生活を余儀なくされておられる方々を思うと、一日も早い復旧を願うばかりです。

友の会ではトルコへの海外美術鑑賞旅行開催が決定し、会員皆様のご協力のもと、前向きな活動へと舵を切る明るい兆しが見えてきました。105号発行に際しては、年末年始のお忙しの中で原稿をお寄せいただいた方々、急な依頼にもかかわらず探訪を快くお引き受けくださった宮本

先生に深く感謝申し上げます。

本号では画像の掲載及びデータの貸与に関して、下記の各氏から許諾をいただきました。

○塩谷 亮「想い」及び原 雅幸「ドイル家のメールボックス」の画像掲載許可をホキ美術館館長 保木 博子氏、画像データの貸与を同美術館 後藤 慧氏

○「関島秀徳展」の会場写真を塩田 釈雄学芸員

○フェデリコ・パロッチ「マドンナ・アル・ポポロ」及び甲斐先生の写真画像データを、当館仲田教子主任学芸員

○篠内佐斗司「昇竜童子」写真掲載

許可を、篠内佐斗司工房及び奈良県立美術館奥谷氏

○茨城県民オペラ協会ニューイヤーコンサート2024の舞台写真を、県民オペラ協会の町田由美子氏

以上の方々へ厚く御礼申し上げます。

茨城県近代美術館 友の会会報
游美 No.105

発行 2024(令和6)年3月
編集・発行 茨城県近代美術館友の会
〒310-0851
水戸市千波町東久保 666-1
TEL.029-243-5111
E-mail : fmomaibk@gmail.com
HP : https://fmoma.com/

印刷 株式会社 光和印刷